

## 国立ロシア美術館所蔵 「ロシア絵画の至宝展 夢、希望、愛」

— アイヴァゾフスキーからレーピンまで —

東京富士美術館（八王子） 2018.10.07～12.24



東京富士美術館 35 周年を記念する海外文化交流特別展として開催されるこの展覧会は、激動の 19 世紀後半に独自の発展を遂げた珠玉の「ロシア絵画 40 点」を紹介するもので、深い精神性に満ちたその魅力に迫る企画である。展示作品は、この時代に活躍した「移動派の画家たち」の絵画で、ロシア・サントペテルベルグの「国立ロシア美術館」が所蔵するロシア絵画の中から、「夢、希望、愛」をキーワードに精選され、画題は雄大で過酷な自然と風景から、ロシア特有の伝統と風俗を描き、人生の葛藤を表現したものまで幅広く、錦秋の美しい「心のロシア」を楽しめる。

イヴァン・アイヴァゾフスキー 《第九の怒涛》 1850 年 油彩/カンヴァス  
嵐の海では、波に一定の周期があって九番目の波が最も強大であるという。

つまり、第一の波から第二、第三と波が次第に大きくなり、第九の波で最高潮に達し、また第一の波に戻る“嵐の海についてのジンクス”に基づくという。

本作品では、夜の嵐の海に投げ出された 6 人の人々と、波のど真ん中で必死に挑んでいる 1 人の英雄が難破した舟の木片に捕まって、荒波の中を漂っている様子が詳細に描かれている画伯の代表作であり、「ロシア芸術の至宝」と称えられる傑作であると評価されている。

イリヤ・レーピン《サトコ》 1876 年



「サトコ」は、古いロシアの竜宮物語で、海中の「サトコ」が海の国の王と后、王女と出会う場面が描かれている画伯の幻想的で美しい「不朽の名作品」である。

この幻想的なロシアの英雄抒情詩を題材とした作品は、得意な楽器「グースリ」で海の王を喜ばせた「サトコ」の前を、褒美の花嫁候補としてさまざまな民族の娘たちが通ってゆく様子が克明に描かれている。

異国の地である。パリでロシア人の血を再発見したとされ、英雄の先にあったのは「ロシアの乙女：チェルンヴァ」だった。